

林歌子の生涯

涙とともに蒔くものは
高見澤潤子



高見澤潤子

涙とともに蒔くものは

林歌子の生涯

主婦の友社

涙とともに蒔くものは 林歌子の生涯

昭和五十六年五月二十九日 第一刷発行

定価 一二〇〇円

著者 高見澤潤子

発行者 石川晴彦

発行所 株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一六

千一〇一 電話03二九四一一一一

振替 東京二一一八〇番

もし落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。お買い求めの書店か、本社へ直接お申してください。

印刷所 大日本印刷株式会社

目次

涙とともに蒔くものは
——林歌子の生涯

1	古新聞の封筒	3
2	五十日の男の子	15
3	英語のリーダー	25
4	声なき絶叫	35
5	手折られて	42
6	二十日間の戦闘	54
7	因果なひと	66
8	神の家族	78
9	アルコールづけの心臓	91
10	書留	105
11	肥料船の月見	117

12	夜の引越し	129
13	嫁探し	140
14	豪華な嫁入り道具	152
15	お菓子のおばあちゃん	163
16	怖いおばはん	170
17	涙とともに蒔くものは	183
18	月給の贈りもの	191
19	美しい秘訣	201
20	世界平和万歳	209

え・堀
文子

1 古新聞の封筒

門松がとり去られたあとに、短い松の枝先が、ほんのおしるしにさされている。

「七日に門松はとってしまったても、十一日の鏡開きもあるし、十五日の小豆粥、お正月はまだ終わっていないというしるしか、お正月を思い切れない未練がましさか、割り切ることの嫌いな日本人の、追慕の情という、やわらかな気持ちのあらわれか……」

歌子は、その名ごりの、土にさされた松の枝をみながら、重い頭で、こんなことを考えた。そして、そんな自分にびっくりした。

「本当に今日はどうかしている。いつもは通りすがりの家々の門の前など、気にすることもなく、日和下駄^{ひよりだ}を、からからいわせながら、わき目もふらず、せかせか歩いていくのに。この重い頭、憂うつな気持ちで、こんなことを考えるなんて、どうかしている。寝不足で、頭が重くて憂うつなのは、今大問題にぶつかっているからだ」

歌子はここで、はっと我にかえた。すべては、昨日うけとった手紙のせいであった。歌子にはわかに、身体がほてってきた。その手紙は、懐の奥深く突っ張って入っていた。三カ月ぶりにうけとった、恋しい人からの手紙であった。恋しい人からの手紙といっても、いつものように、古新聞

で不器用につくった封筒に、字だけは非常な達筆で、筆太に「林歌子殿」と書いてあった。

手紙の内容は、歌子にとって大問題であった。昨夜一晩中、まんじりともせず、考えつづけても、きめられなかった難問題であった。

歌子は溜息^{ためいき}をつき、毛糸のショールをひき上げ、顔を埋めて、足を早めた。

明治十年に、日本最初のプロテスタント宣教師、C・M・ウィリアムズ主教によって、創立された立教女学院は、その頃、立教女学校といって、築地にあった。歌子はその立教女学校の国語、漢文、数学の教師であった。

若くて、きれいで、頭がよく、優しさがあふれている林歌子は、たちまち生徒たちに慕われ、人氣を集めた。小柄ではあるが、紫の袴を胸高にはいた、さわやかな知的な風采も、齒切れのいい、すきとおった声も魅力的であった。

歌子は、生徒を可愛がり、親切に熱心に教えた。そればかりでなく、信仰の面においても指導的な立場にあり、学校に対しても、誠実であった。教育面はもちろん企画や行事や経営についてまで、新しい意向を考えては、進んで実行するので、学校もだんだん歌子を重くみて、就職して五年たった今では、なくてはならない重要な地位にあった。男子の教師をしのぐ、大きな存在であった。

一月十二日、昨日の朝のことであった。教員室に入り、歌子は机の上に、古新聞でつくった、分

厚な封筒がのっているのをみた。彼女ははっとした。古新聞の封筒は、小橋勝之助からだ、とすぐわかったからである。

歌子は、身体中がもえるように熱くなった。胸がどきどきした。ただ嬉しいというより、不安と恐れの方が先にきた。四年前に、勝之助が赤穂の瓜生村に帰ってから、絶えず二人は手紙で、おたがいの様子は、知りつくしていた。勝之助が全財産を投げ出して、博愛社を創ったこと、前の年の濃尾大地震の折、病気の身体なのに無理をして、五十日間も罹災者救済のために働いたこと、それからぐっと身体が弱ってしまったこと。しかしその後、歌子が何度か手紙を出しても、返事がなかったからである。

すぐにでも、開いて読みたかったが、もう朝の礼拝の時間であつた。彼女は、その封筒を懐にして、朝礼に出席し、つづいて、一時間目の数学の授業に出た。

授業が終わると、まだ講壇をおりないうちに、すばやく五、六人の生徒が、講壇のまわりをとりまいて、質問や雑談を始め、少しでも歌子をひきとめようとした。

いつもなら、また椅子に腰をおろして、一人一人の幼い質問や、無邪気な訴えに、熱心にゆっくりと応じる歌子であつたが、今日は、早く一人になりたくて、突っ立ったまま、手早く切り上げ、余計な口を全然きかないで、さっさと教室を出ていった。生徒たちは、顔を見合わせた。こんなことは、初めてのことであつた。

二時間目はあいていた。鐘がなって他の教師たちは、それぞれ授業に行つてしまい、教員室には、向こう側の隅に習字の教師だけぽつんと残っていた。歌子は懐から重い手紙を出し、急いで封

筒から中身を取り出した。手が震えていた。

「昨年来意外に多忙にて、委細書き送る事を得ず候て遺憾に存じ候処、今般主の御命により、我儕が貴姉に希望する所を腹臆なく申述べざるを得ざるに到れり……」

ここまで読んでくると、歌子の胸は激しく騒ぎ出した。

しかし、なかなかこの手紙の差出人は、自分の感情を、表面に出さなかった。

「今般我儕は、主の導きにて、博愛社の外に、名古屋震災孤児院を設立致し候、これにつき多くの献身者を要する様に相成候。男子の献身者少くなく候えども、女子の献身者未だ乏しく殊に主任となりて多くの女子を率る器量ある女子に到っては殆んどなし。文学的の婦人は多く見受くるも、実業的（学問と習い覚えた業とで働く活発なる労働婦人）婦人（クリスチャンにして）に到りては実に稀なり。箴言三十一章に記しある婦人を養成するは、目下の急務なりと存じ……」

歌子は、胸を沈めるために、手元の旧約聖書の箴言最後の章、三十一章を開いてみた。初めの部分は、母が子に、酒を飲むことを戒めた言葉で、あとの部分とは関係ないように思われるが、あとは、賢い妻について記してある。夜の明けぬうちに起き、休まず働き、夫や子供たちのためにつきし、貧しい人にも手をさしのべ、力と気品と知恵をもつ、彼のいわゆる「実業的婦人」が記してあった。

つづいて勝之助は、二年前から郷里兵庫県赤穂で開いている博愛社（孤児収容所、その頃は孤児院といていた）の様子をこまごまと書いていた。目下孤児四十二人、預かっている子七人、男子の教師、働き人は五人ほどいるが、こまかいところを世話し、同時に教育、指導出来る婦人が、ど

うしても必要だ、というのである。

「……生涯独身にて主に仕え、男子の孤児に感化を与え、実業的婦人を養成すべき女子実に必要な候、社員の輿論にては貴姉が適當ならんとの事に候。貴姉が博愛社に対し多大の尽力されし故に候……」

歌子は、どこまでも、自分の意志をあらわすまいとしている彼の気持ちに、よくわかつて、腹立たしくもあり、ほほえましくもなるのであった。

「然れども、貴姉にも家族の係累有之、又当今立教女学校にて、貴重なる地位に居られ候事と遙祭仕候。然れども以上の事主の聖旨にかない、日本将来にとりて大切な事なれば、軽き事は自然主の恵みにて、都合の出来る事も有之候。何卒此事輕き事に御考えなさらず、主に御熱禱下され、篤と御勘考の上御意見御申越下され度候。以上の事嚴本兄、大須賀兄にも書翰を贈り、相談致しおき候間、主の聖旨と同兄等の熟議とによりて、貴姉の方針をお定め下され度候」

そして「副白」として、

「松原愛姉は、名出氏ないでと既に結婚なされ候由、延引、貴姉より祝賀之儀を御伝言被下度候。願くば夫に仕うる事によりて、主に対する信仰の鈍らざるよう切に祈るとお伝え被下度候。小野田兄は岡山孤児院にて働き居り候。頓首

一月十日夜認む

小橋勝之助

林 愛姉

」

松原とか小野田とか、手紙に出ている人たちは、四年前までは、始終教会でおちあい、小橋勝之助を中心として、信仰について議論したり、人生の問題について、夜を徹して語りあったり、祈りあったりしたなつかしい人たちであった。特に、松原昱子^{いづみこ}は、同じ立教女学校の教師だった女性で、歌子と同じように、勝之助を尊敬し、彼のすすめるままに、親の反対をおし切って、信仰に入った人であった。

小野田鉄彌は、小橋勝之助より前から教会に行っていて、教会でオルガンも弾いていたが、勝之助と同じ志をもっていたので、勝之助が、郷里で博愛社を始めると、すぐ彼を助けるために、博愛社の職員になった。

勝之助が同時に手紙を出して、相談したという巖本は、その頃「女学雑誌」という高級な婦人雑誌を出版し、明治女学校の校長で、若山賤子の夫であった有名な巖本善治^{よしはる}であり、大須賀は、勝之助の教会の仲間であり、その頃は、やはり立教女学校の教師をしていた、大須賀亮一であった。あいにく、その日は学校に姿をみせていなかった。

手紙の中には、愛すとか恋しいとかいう言葉は一つも書いてなかった。必要な用件、状態の報告、依頼だけであった。しかし、言葉には全く表現されてはいなかったが、その裏に歌子は、勝之助の自分に対する愛情と信頼が、ひしひしと感じられて、胸をしめつけられる思いであった。熱い涙があとからあとからあふれ出た。

「どうしたらいいだろう」

どうにもきめかねる大問題であった。

博愛社に行くことは、父母や妹たちをすてることであり、学校をすて、生徒をすて、ある意味では自分もすてることであつた。学校にとどまれば、すべて周囲の者たちは尊敬してくれ、重んじてくれ、喜んでくれ、自分も樂に、自分の才能をどこまでも生かし、幸福であり、はなやかな生活であることは明らかであつた。

鐘がなつた。

歌子は、あわてて、手紙を封筒の中におしこみ、懷の奥深くにしまいこみ、鏡を出して、顔をおした。一人、二人と教師たちが戻ってきて、教員室も騒がしくなつた。

「先生……」

歌子は、すぐ側でよびかけられ、ふりかへつた。三年の帆足という生徒が立っていた。彼女は、長崎で石炭問屋を大きくやっている家の娘であつた。遠くから来ている生徒なので、歌子と同じ寄宿舎に住み、歌子は、いろいろ母親代わりに面倒をみ、歌子の行っている神田基督教会にもつれて行つた。父の帆足義方も、所用で時々東京に出てきて、娘にあう度に歌子にもあつていた。そして娘と、歌子につれられて、神田基督教会に行っているうちに、キリスト教の信仰をもつようになり、ウイリアムズ主教から娘と一緒に洗礼をうけたのである。

「なあに？　帆足さん」

「先生、みんな心配してるんです」

「何を？」

「林先生は、今日はどうも変だ、っていうんです。どうしたのか、きいてこいって、いうんです」
「どうも変だって？　そうかしら」

「私なら、本当のことをおっしゃるだろうから、よくきいてこいって、いうんです」

帆足は、近くの先生にはきこえないように、小さな声でいった。

歌子は、敏感な生徒の気持ちに、驚きながら、またこんなにまで、自分のことを思ってくれる生徒の気持ちに、嬉しくて、また涙ぐんだ。

「悪かったわね、心配かけて。一寸ね、むずかしい問題にぶつかつたもんだから、今、一寸困ってるんだけど。でも、そのうち解決がつくと思うから、大丈夫よ、心配しないで」

「でも……」

「大丈夫。いつまでも困っているような、林先生じゃないことは、よく知ってるでしょう。みんなに安心するようにいって、ね」

歌子はやっと帆足を、なだめて帰したが、こんなにまで慕っている生徒たちを、裏切ることは、とても出来ない、と深い溜息をつくのであった。

立教女学校を創立し、神田基督教会の宣教師もしていたC・M・ウイリアムズ主教は、その頃、立教女学校の隣に、七十坪もある広い家屋を建て、二、三十名の孤児を収容していた。歌子も松原昱子も、また生徒たち——この中には帆足も入っていたが——が、かわるがわるそこに手伝いに行っていた。

歌子は、その日学校の帰りに、東京救育院というその施設によった。

黒い長いガウンを着た、背の高い、白い長いあごひげをたらした主教は、大きな目をみはって、
にこにこして出てきた。

「おお、歌子さん、今日はお一人ですか？ 何、手伝って下さいますか？」

「今日は、手伝いに来たんじゃないんです。一寸ご相談したいことがあります……今お時間、よろしいでしょうか？」

「よろしいですとも。どうぞ、どうぞ」

主教は、先に立って、自分の書斎に入っていった。調子のはずれたわめき声もまじる、しかしみんな精いっぱい歌っている、子供たちの歌声が、ドアをしめると同時に小さくなった。

歌子は、小橋勝之助の手紙を、出し、内容を全部主教に語り、自分ではどうしたらいいかわからないが、主教はどう思うか、どうすればいいか、教えてほしいと、頼んだ。主教はしばらく、白いひげをしごきながら、うつむいて考えていたが、ゆっくり、ぼつり、ぼつりといひ出した。

「むずかしい問題です。あなたにとって、大きな事件です。よく考えて、真剣に祈ることです。博愛社も大切です。教会も、学校も大切です。ただ、あなたに与えられている賜が、どの仕事に最も、充分に用いられるか、それを祈って、発見することです。そして、どこにも困難、苦勞はあることは覚悟しなければなりません。急ぐことはありません。じっくり考え、真剣に祈ることです」

ウィリアムズ主教も、歌子は、博愛社で働くような女性ではないことを、よく知っていた。彼女はあくまでも知的な、頭腦的な女性で、教育、指導、計画、経営といった面では優秀だし、相当の難問題にもぶつかってゆけるが、母性的、家庭的な仕事にはむかない、ということとは、歌子自身よ

りもつとよく知っていた。

一時的な感情で、勇躍、博愛社にとびこんでも、堪え切れず、みじめな敗北姿で帰ってくる歌子を、みるに忍びなかったのである。しかし信仰の上から、博愛社に行くのはよせ、というべきでもないと考えたのである。

強い決断力と判断力をもった歌子は、これまで、ひとの問題でも、自分の問題でも、大体何とか決してきた。しかしこの問題だけはその夜一晩中、祈り考えても駄目であった。

考えあぐねて、歌子は、その翌日、学校が終わると、名出保太郎牧師と昨年の秋結婚した昱子の新居を訪ねるために、学校を出たのであった。

正月に入って少し日がながくなったような気がしても、冬の夕暮れは暗くなるのが早く、もう外では、顔が見わけられないようになっていた。格子戸をあけた昱子は、暗い外に立っている歌子を、首をのばして、やっと見きわめて、びっくりしたような声を出した。

「まあ、歌子さん……」

「ごめんなさい、こんなおそく、急に伺ったりして……」

昱子は、歌子のいいわけなど耳にしないで、腕をとって、ぐいぐい家の中にひきずりこむほど喜んだ。

「あいたかったわ。よく来てくれたわね。いろいろ話がききたいと思ってたの。名出ももうじき帰ってくるわ」

歌子は、新婚の喜びであふれている昱子に、自分のこの問題をじっくり考えてもらうのは、悪いような気もしたが、何もしらず、勝之助の手紙を、昱子の前にさし出した。

「昨日、こんな手紙が来たの」

昱子は急にまじめになって、ていねいに手紙を読み出した。

読み終わってから暫く黙って考えていたが、やがて、思慮深い目で、じつと歌子をみて、静かにいった。

「勝之助さんがどんなに困っているか、よくわかるわ。あなたをどうしても、ほしがっていることも。そりゃあ、あなたが行ってあげれば、どんなに喜ぶか、博愛社にとつても、どんなに助かるかわからない……あなただつて、何もかもすてて、とんで行きたいでしょう。でも、あなたは結婚は出来ないっていったでしょう。行つてはいけないわ。学校のためにも、ご両親のためにも、あなた自身のためにも……」

親友の真実な言葉は、歌子には痛かった。

「博愛社に行かなくなつて、出来るだけの援助は出来るわよ。あなたの使命は、教育者として、神の御用をすることなのよ。教師だつて伝道は出来るんだし……」

歌子は、歌子のためを思ってくれる、誠実な忠告に、一言も返す言葉はなかった。

歌子は、暗い夜道を、日和下駄をからからと、小さく音を立てて、帰っていった。

「結婚出来ない……」

という言葉が、重く胸にしみこんでいき、いまわしい過去の思い出が、夕立雲のように頭にひろ

が
っ
て
い
っ
た。
。